1Ma-4

農村地帯における支持家具の導入
－富山県砺波地方の場合－

○吉見静子　小森歌織
（岐阜女子大）

目的：明治以降、上層階級・知識階級をはじめ、都心部の中産階級においても、住宅に椅子をはじめとする西洋家具が導入され、住生活に影響を与え、その歴史も明らかにされてきている。しかし、一般庶民の住宅についての詳しい論述は、浅学故か、目にすることが少ない。そこで、一般庶民の住宅における支持家具の導入過程を明らかにする試みの１つとして、砺波地方の散居住居における支持家具の導入とその特性を明らかにする。

方法：富山県福光高等学校生の120家族、砺波地方の住民の30家族を対象として、アンケート調査を行い、詳細については、その地域の古老３人に聞取り調査を行った。回収票は92票で、そのうち、今回は伝統的な散居住居に住む51家族のアンケート票を対象とし、集計を行い、考察した。

結果：支持家具の導入は主に第２次世界大戦後で、明治・大正は皆無であった。最初に導入された支持家具は足踏みミシンの椅子であり、早い例が昭和11年で、その後昭和40年の間に導入。次に学習用の机と椅子であり、早い例が昭和26年で、昭和40年の間に導入。第３は食事用のテーブルと椅子であり、早い例が昭和30年で、昭和45年の間に導入。第４は接客用のテーブルと椅子であり、早い例が昭和36年で、昭和50年の間に導入。第５は鏡台の椅子で、早い例が昭和36年で、昭和55年の間に導入。第６はソファで、早い例が昭和36年で、昭和55年の間に導入。第７はベッドで、早い例が昭和40年で、昭和55年の間に導入されている。以上の結果から、上層階級にみられるステータス・シンボルとしての家具ではなく、実用性の高い家具を、順次導入していったことが解る。